

齋藤木の「支那文學史」講義録について

——東京専門學校文學科成立初期の中國文學史講義——

陳 廣 宏

齋藤木（一八六一—？）の「支那文學史」は、早稻田大學の前身、東京専門學校の文學科二回生のために教授された講義であり、明治二十五年（一八九二）十月から明治二十六年（一八九三）二月まで行われた。當時の在學生島村生（島村瀧太郎〔抱月〕一八七一一九二八）のノートが現存し、饗庭篁村（一八五五—一九二二）の「近世小説史」、坪内雄藏（逍遙）（一八五九—一九三五）の「英文學史」、鈴木弘恭（ひろやす）（一八四四—一八九七）の「百人一首講義」の諸講義とともに一冊に合訂されて、早稻田大學圖書館貴重書庫に收藏されている（請求番號：特別イ040223618）。

一、講師齋藤木について

『早稻田大學百年史』第一卷（早稻田大學大學史編集所、一九

七八年三月）には、明治二十五年（一八九二）に刊行された『東京専門學校改正學課表・各部擔當講師人名表・改正規則』について言及した一章があり（第三編「東京専門學校時代後期」の第五章）、明治二十五年〜二十六年度に、當該「改正學課」を擔當した講師計六十五人の氏名が、學部・學科別に掲載されている。この「講師人名表」のなかで、齋藤木の名は、「文學部」^①および「專修英語科」に列せられている（六九八頁）。また、同卷に附録された第二十二表「講師就退任および擔當科目（明治十五年十月—三十五年八月）」によれば、齋藤の在任期間は、明治二十四年（一八九一）十月〜三十四年（一九〇二）七月であり、擔當した科目に、「支那政治哲學史」、「論文演習」、「詩經」、「老子」、「史記」、「漢文」、「政記」等があった（二〇三五頁）。本書の索引によって、これ以外にも彼に關わる

若干の情報がみつかるが、どうやら彼は、早大文學科の歴史において、ほぼまったく特筆すべき足跡を残さなかつたようである。『早稻田大學文學部百年史』（早稻田大學第一・第二文學部、一九九二年九月）や『早稻田大學學術研究史（文藝・人文科學部門）』（早稻田大學大學史資料センター、二〇〇四年四月）にも、その他早大関連の人物傳記資料のいずれにも、彼の記載は見えず、まして彼の功績を論じたものは一切見つからなかつた。唯一、「早稻田大學寫眞データベース」のなかから、彼に關連する寫眞二葉を搜し得た。ともに東京専門學校專修英語科卒業記念のもので、明治二十八年七月に撮影されている。また、市島謙吉〔春城〕（一八六〇—一九四四）の『春城日志』（十九）「雙魚堂起居注」大正元年（一九一二年）九月十九日の日記に、「廣田金松、齋藤木、下林貞雄來る」とあることから、齋藤が早大を離れた十年後にも、市島との間に行き來のあったことが分かる。

この他、比較的重要なものに、東京大學総合圖書館、國會圖書館等が所藏する、齋藤木著『日本倫理原論^③』（東京、青槐書院、明治三十五年五月）がある。この書は、巻首の「例言」によれば、明治三十一年（一八九八）、陸軍中央幼年學校にて教鞭を執っていた期間に、校長谷田氏の出した課題に應え、

數日の間に執筆・完成させたものである、という^④。筆者は、該書の巻首に掲げられた「自序」のなかで、齋藤が「先考赤城先生家訓」を引用していることにヒントを得て、『與板のひとびと——與板の人物誌』（與板町教育委員會編、平成十七年三月）という書に「齋藤赤城——青根（按ずるに「青槐」に作るべきである）書院の創設・初代與板小學校長」という一文が含まれている事實を探り當てた。それによつて、齋藤氏が與板（現在の新潟縣長岡市與板町）の人であることを知り、さらに『與板町史』資料編下卷（與板町編集發行、平成五年三月）と同書通史編下卷（同上、平成十一年三月）を調査し、ついに齋藤父子に關わる傳記資料を搜し得た。以下、それを整理して紹介する。

父齋藤三郎（一八二四—一八八六）は、赤城と號し、鹽商の家庭に生まれた。はじめ藩士の廣瀬玉圃について學び、十九歳で江戸に出て、佐藤一齋等の塾で學んだ。二十五歳で歸郷し、その年（嘉永元年（一八四八））、自宅に漢學専門の私塾——青槐書院を開設する。その後、明治六年（一八七三）、與板校（與板小學校の前身）の初代校長を務めた。明治十年（一八七七）三月、與板校の職を辭し、三年後、再び漢籍専門の私塾——北陸義塾を開設。明治十五年八月に、名を青槐書院

と改めた。⁽⁵⁾

齋藤木（一八六一—？）は、もとの名を和内といい、文哉と號した。早年より、父とともに與板校に奉職した。彼らが共同で北陸義塾を開いていた時期、齋藤木は『北陸新志』の發刊を計畫したが、これはいわゆる風俗教化の詩歌や文章をもつばら集録する文雅な新雜誌であつた。明治十三年（一八八〇）十月、二十歳の時、國會開設の必要性を説くために佐渡に渡り、現地の地主と一致協力して「國會開設懇望協議會」を組織し、同時に「北陸義塾教員」の名義で、全國的な廣がりをもつ福澤諭吉系の文詢社に加わつた。明治十六年には、多くの聲望を集めたことにより、早くも現地のメディアに取り上げられ、彼の著書『文哉洞經解』が三條太政大臣によつて天皇に上奏されたこと、ならびに一年前に東京より歸郷した際、東京の著名な漢學者川田瓮江（彼もまた佐藤一齋の門下に學んだ）〔一八三〇—一八九六〕から詩を贈られ、そのなかに「瓮江の知己少なしと爲さざるも、北越の文哉最も絶倫なり（瓮江知己不爲少、北越文哉最絶倫）」の句があつたこと等が報道されている。彼の名聲は、父の他界後も繼續した私塾を一層隆盛させ、生徒の數も急増した。しかし、明治二十二年（一八八九）に青槐書院を閉鎖し、與板を離れて上京する。そしてこの年、

齋藤木の「支那文學史」講義録について（陳）

名前を「木」と改めた。二十九歳のことである。東京では、博學で文章に優れていたことにより、早稻田大學、東京大學、および陸軍大學校⁽⁷⁾において相次いで教鞭を執り、政界では山縣有朋（一八三八—一九二二）、桂太郎（一八四八—一九一三）等と意氣投合し親密な關係を結んだ。

以上の記載から分かることは、第一に、齋藤木の出身は、江戸後期以來の漢學者の多くがそうであつたように、庶民を教育することと興起した地方の教育家であり、その由緒正しき家學によつて、人なみはずれた儒學の素養を持つていたことである。そればかりでなく、彼が青槐書院を閉鎖して上京する前の一年間、すなわち明治二十一年には、書院の教學内容もすでに漢學と英學とを兼備していた。さらに、後の「支那文學史」講義と『日本倫理原論』とが西洋の學問を頗る取り入れていることを考慮に入れれば、彼の學問もまた、時代的風潮に呼應して、傳統漢學の守備範圍をすでに超えていた、と考えられる。さもなければ、東西文明の調和を教育目標に掲げる東京専門學校の講師の陣容に加わり、さらには漢學と專修英語の二つを兼ねることなどできようはずがない。

第二に、青年時代に積極的に自由民權運動に身を投じた經歷から見て、彼は政治に情熱を燃やした人物でもあつた。む

ろんこれは、經世を重んじ道德の實踐を旨とする儒學者の傳統から出ている、と見なすこともできる。だが、明らかにもつと蓋然性が高いのは、當時の時勢に大いに刺激された、という理由であろう。そしてそこに、漢學を革新して實用性を高めねばならぬという社會の要請に應えようとする思いが、何ほどかは存在したであろう。この點において彼は、同じく新潟出身の市島謙吉とまさに近似する傾向をもつていた。その市島は、高田早苗を中心に結成された鷗渡會の成員となり、大隈が創立した立憲改進黨を支持した。あるいは、市島との交友が、齋藤をして東京専門學校の講師陣に加わることを可能ならしめた、もう一つの原因なのかもしれない。

明治二十五年一月に發行された『同攻會雜誌』には、東京専門學校の「大演說討論會」第七回（二十四年十二月十三日）の記事があり、齋藤が「周家の政略」という演說を行ったことを傳えている。これは、翌年に講義する周代文學に對する考え方が、この時すでおおむね完成していたことを示す一方で、東京専門學校に來たばかりの頃の、彼の目的と姿勢とがはつきりと現れ出てもいる。このような政治に對する高い關心は、彼の學者人生においてずっと一貫しているが、中年になって、さらに力を込めて日本の倫理思想を詳述しつつ、

天皇による君主政治護持の説を唱えたのは、庭訓に由來する個人的背景に加えて、日増しに高まる民族主義的觀念によつてそれが大いに鼓舞されたという當時の社會背景にも由來しているであろう。彼と長州の軍閥ならびに政治家、たとえば山縣有朋、桂太郎、寺内正毅等との關係は、⁸⁾彼が陸軍中央幼年學校に行き教鞭を執つた経歴と關連づけて考慮すべきであり、同時にそれは當時の彼の政治的な立場が如何なるものであつたかを多少なりとも具體的に示している。

『日本倫理原論』の「例言」によれば、原稿が完成したのち、彼は東大や早大の同僚、井上哲次郎（一八五六—一九四四）や有賀長雄（一八六〇—一九二二）、松崎藏之助（一八六五—一九一九）に論評を求めている。そのため該書には、三氏がそれぞれ明治三十一年十一月八日、十三日、十五日に批評した識語が含まれる。また、文字の校訂は、布施知足、伊藤重治郎、八田亨の後輩三人が擔當した。⁹⁾この點からも、當時の學界における彼の人間關係ならびに地位を窺い知ることができよう。そのほか、注目に値するのは、清朝の著名な學者、吳汝綸（一八四〇—一九〇三、字摯甫、安徽桐城の人）との交遊である。吳氏は光緒二十八年（一九〇三）五月に、京師大學堂總教習の身分で來日し、日本の學校制度を視察しているが、その間、

日本の外交官や文部官、ならびに教育界の著名な人士の多くと交流し、相互の認識を深めるとともに、西學の衝擊下にある傳統的な學術教育の諸問題について詳しく議論した。彼の日記によれば、この年の六月十九日に陸軍幼年學校を視察している^⑩ので、齋藤と知り合ったのも、ちょうどこの時であろう。齋藤はすぐさま吳氏に書簡を送り、吳氏は七月二十五日に東京にて返信している。齋藤はさらに書簡を送り、吳氏も八月三日に再びそれに答えている。二人の書簡のやりとりは、主に齋藤の『日本倫理原論』をめぐるもので、儒家の倫理・哲學思想について論辨を展開している^⑪。また、吳氏の書簡「齋藤木に答ふ」によれば、吳氏と井上哲次郎の會見は、齋藤の仲介により實現したものであった。

二、文學科成立初期におけるカリキュラム編成

周知の通り、東京専門學校は、明治二十三年九月、主に坪内逍遙の提唱によって、既存の政治經濟學科、法律學科、理學科のほかに、文學科を創設した。創設の理念は、學生に對し「和・漢・洋三文學の形式と精神とを兼修せしめ」ることを要務とする、ということであった。それゆえ、明治維新以來、洋學、國學、漢學という概念が生成されたことを基礎と

して、英文學、國文學、漢文學三專修による、かなり壯觀な講師陣が構成され^⑫、早大人文系學科の建設と發展のために重要な礎石が据えられたのである。

文學科のカリキュラムは、明治二十五年九月の「改正學課表」(前掲『早稻田大學百年史』第一卷、689頁以下所掲の第七表)によると、漢文學、國文學、英文學、史學、哲學の五大科目に體操と參考課を加えて構成されている。そのうち漢文學は、第一學年に「述義(經書、子類)」と「評釋(傳奇、小説)」、第二學年も同様で、第三學年は前期に「翻譯」と「創作」、後期に卒業論文となっている。また、文學史の類は、史學の科目中にあり、第一學年前期は「列國史」と「日本文學史(自古代至中世)」、後期は「列國史」、「日本文學史(自中世至近世)」と「英文學史」、第二學年の前期は「支那文學史(自周至後漢)」と「英文學史」、後期は「支那文學史(自後漢至清)」、第三學年は「美術史(建築、彫刻、繪畫等)」で、前期は「古代から」、後期が「近世に至るまで」となっている。この時以來、規格標準化されたカリキュラム表からはつきり知られるのは、齋藤の件の文學史講義が、第二學年の前期に開設された「支那文學史(自周至後漢)」であったことである。

さらに、齋藤と同じく文學科成立の翌年に、漢文學・史學

の講師陣に加わった人に、松平康國（一八六三—一九四五）がいる。彼は長崎出身の漢學者で、若い頃、堤正勝、重野成齋、三島中洲に師事した。當時、彼は米國ミシガン大學の留學から歸國したばかりで、擔當した史學の授業も主に西洋史であった。のちに、早稻田大學文科講義録として、彼の『支那文學史談』が刊行されてもいる。¹³ また、前掲「講師就退任および擔當科目」表（『早稻田大學百年史』第一卷附録、第二十二表）によれば、齋藤も漢文學の「述義」等の授業を擔當していた。第三期の學生、徳差鐵三郎、網島榮一郎、朝河貫一等が編纂した卒業文集『おもかげ』の「同窓小志」には、彼らが明治二十五年から二十六年六月までの第一學年に實際に受講した科目の内容と講師について述べた部分があり、「坪内（逍遙）講師のマルチャント・オブ・ベニス、テーンの英文學史、大西（祝）講師の論理學（形式的論理學、因明、シル氏歸納法大意）、齋（藤）木講師の孟子、松平（康國）講師の歴史、森（槐南）講師の『桃花扇』、畠山（健）講師の『古今集』、『枕草子』、關根（正直）講師の日本文學史、國語學、『源氏物語』、『枕草子』……」¹⁴と記されている。小久江武三郎編『早稻田文集』（一九八三・一〇—一八九四・三）所收の齋藤木「詩は志を言ふとは何ぞや」、「支那の論理法」等は、この教學期間における

副産物である。

ただ、當時の學生の反應はというと、齋藤の「支那文學史」はほとんど歓迎されなかつたようで、「支那文學史」の授業は残し、齋藤講師を替えるよう要求する學生さえもいた。¹⁵ もちろん、これは齋藤個人の授業能力にも起因しているであろう。たとえば、當時の學生がもつとも興趣をかき立てられたのは、坪内逍遙の「英文學史」と大西祝（はじめ）（一八六四—一九〇〇）の「倫理學」であり、前者は「滿堂の學生 醉へるが如く」¹⁶であり、後者についても明治二十七年の卒業生、後藤宙外が「謹嚴周到、熱誠溢れ、學生は常に醉えるが如くであつた」¹⁷と述べている。しかしながら、われわれは以下の點にも留意すべきである。すなわち、文學科成立時の學生募集廣告には、初め「英語文學科」の名稱が用いられていた（明治二十三年六月十八日付『讀賣新聞』）ことである。これは學校が、英語と英文學の教育を主とする方針に立ち、それを文學科の特徴としたことを反映している。そのため、建學の當時、授業時間の配當は、英文學が毎週十五時間または十七時間であつたのに對し、國文學はわずかに四時間であり、漢文學にいたっては三時間しかなく、明らかに從屬的な併設科目の地位づけであつた。參考課のうち、文學關連では、「近世國文」を除くと、「英詩批

評、「大陸文學史」等の科目があるが、やはりいずれも西洋文學であつた。よつて、當時のカリキュラム全體における漢文學の比重は軽く、齋藤の講義にそもそも學生の關心が集まりにくい構造があつたこともまた事實なのである。

この他、注目に値するのは、——他に先がけ明治二十三年に、東大の同僚高津鍬三郎（一八六四—一九二二）とともに、初の『日本文學史』を完成させた——三上參次（一八六五—一九三九）が、明治二十四年十一月から二十五年四月まで、東京専門學校文學部で國文學の科外講師を勤めていたことで、「近世史」等の科目を擔當している。彼の『日本文學史』は、率先して西洋の國別文學史の體系を參考にしており、文學史研究の領域において畫期的な意義を有していた。彼の先進的な文學史に當時の學生がどれほど影響を受けていたかは詳らかにできないが、彼の出校は、創設されたばかりの文學科の學舎に、新しい文學史の思潮が流入していたことを強く暗示している。また、島村抱月自身がやや遅れて母校で講義した『支那文學史講義筆記』（早稻田大學圖書館所藏）の内容から判斷すると、彼の講義の考え方と枠組みは、主として、新漢學派の代表、藤田豊八（一八六九—一九二九）の『支那文學史』（東京専門學校文學科講義録。一八九五—一八九七？）に刺激を受

けており、彼が直接受講した齋藤の影響は認められない。これらは、いずれも以下のことを示唆している。つまり、齋藤の講義が内包する、新舊方法論の過渡期にあるがごとき特徴は、すでにより多く歐米様式の洗禮を受けた東京専門學校の進歩的な學生の間にあつて、彼をある種氣まずい立場に追いやったのではないか、ということである。この點に關しては、以下、さらに検討を進めることになるが、あるいはこの點も、彼が早大の歴史において何ら足跡を残さなかつた重要な原因なのかもしれない。

三、齋藤「文學史講義」の基本構成と内容

島村抱月の手になる齋藤木「支那文學史」ノートは、縦22.6 cm、横30 cm大の無地の半紙に、半葉十二行、行25 cm前後で書き込まれ、計五十七葉からなり、線装和綴じの装幀が施されている。

講義の内容は、「支那文學史總論」、「文字史」、「音韻史總論」、「文學史本論」の四つの部分から構成されており、目錄はないものの、各章節の題目ははつきり表示されている。今、その題目と葉數を以下に示す。

一、支那文學史總論……………1表〜4表

二、文字史

- ・文字ノ創始……………4 裏 15 表
- ・文字ナル熟字ノ創始及書、名、文……………15 表 17 表
- ・六書……………17 表 26 裏
- ・音形義……………27 表 29 裏

三、音韻史總論

- ・第一聲……………31 表 33 表
- ・第二音……………33 裏 35 表
- ・文節……………35 表 35 裏
- ・五帝時代ニ於ケル聲音ノ性質及其發達……………35 裏 39 裏
- ・周時代ニ於ケル聲音ノ變遷……………39 裏 42 表
- ・四聲……………42 表 43 表
- ・第三韻……………43 表 44 表

四、文學史本論

- ・支那文學史ノ時代及概綱……………44 表 45 裏
- ・周代ノ文學……………46 表 50 裏
- ・周初ノ文學……………50 裏 57 裏

「支那文學史總論」では、彼のいわゆる支那文學を、「發明の時代（周）」、「訓詁の時代（漢）」、「理氣の時代（宋）」、「考證の時代（清）」の四期に分け、順次、各時期の著述の成果と

發展變化の大勢を略述している。

後世ニ至リ進ミタルモノアルモ基本ハ周時代 則發明時代ニ歸スルナリ 周代ハ好テ人ノ語ヲ套取シ人ノ言語行爲ニ倣フコトハセサルナリ 何レモ各自家ニ於テ創始シ人ノ外ニ出テントハセルナリ 所謂發明ノ時代之ナリ

後世に進歩はあつても、基本は周時代にあるので、周代こそは「發明の時代」である、という。そして、漢代は淮南子〔淮南王劉安〕、王充、揚雄等が「文壇に一旗幟を立て」たが、その他の漢代儒者は訓詁に徹するばかりで「文字の解釋者」に過ぎない、と斷じている。漢以降、清に至るまでの變化については、

漢三國時代ヨリ唐ニ至リテハ文學ニ一ノ變化アリ 古人ノ說ノミヲ見テ人各有スル思想ヲ發スヘシト云フニ在リ 且前代之字引（訓詁）ハ出來テアルカ爲メニ其等訓詁ノ必要ナキニヨリ 古文ノ復古スルニ至ルハ 自分之思想ヲ述ヘシニ由ル 併シ皆周代ニ根據アルナリ 韓退之ノ如キモ 周禮儀禮記ナドヲ能ク上手ニ詮シエタルモノナリ 段々後世ニ至リテ人ノ氣ハ高尚ニナリ 古書ヲ見テ發見スルコトアリ（換骨奪胎） 次ニ宋ニ至リテ 思想ハ

更ニ大ニ高クナリ 程子朱子出テテ 漢代ノ訓詁ヲ悉ク破
リタリ 清ニ至リテハ 經書ニ己ノ見聞セシコトヲ集メ附
記シテ 訓詁ヲ止タ一言毎ニ證據ヲ取りテ 己レノ信スル
說ヲ立ツ 所謂折衷說之ナリ

と説いている。注目に値するのは、彼がすでに小説にも言及
していることで、『漢武内傳』、『飛燕外傳』、唐の『遊仙窟』
等を取り上げ、先秦の莊子に類する寓言故事が小説の端緒を
開いた、としている。この他、「總論」のなかでもつともユ
ニークなのは、「道德」と「五常」に對する以下の分析である
う。

後世（漢以下ヲ後世トイフ）ニ於テ道德仁義禮智信ノ道德
ヲ省キテ 仁義禮智信ヲ五常ト云フ 此五常ハ天下萬世ノ
基本ナリ 漢以下今日ニ至リテ 人ノ疑ハサル所ナリ 道
徳ハ道德 五常ハ五常トシテ分ツナリ 是等ハ皆社會即時
代ニ依リテ名ケシモノニテ 道（三皇）、徳（五帝）、仁義
（三王）、禮（周）、智（周末）、信（漢）斯ノ如シ 周末ニ
テハ 信トイフモノナシ 彼ノ老子ノ道德道德ト説キシ
ハ 三皇五帝ノ歴史ヲ調ヘ研究セシニ由ルナリ 人ト人ト
ノ關係ハ道德、人ト神トハ宗教ナリトハ 今世ノ説ナル
ガ 支那ニ於テハ 人ト神トハ徳 己ヲ謹ムハ道ナリ

齋藤木の「支那文學史」講義録について（陳）

仁、義、禮、智、信を五常とするのは漢代の説で、道德を切
り捨てるが、實は、「道」||三皇、「徳」||五帝、「仁義」||三
王、「禮」||周、「智」||周末、「信」||漢であり、社會、すな
わち時代に即した名稱である、と説く。

「文字史」では、主に「文字ノ創始」と「文字ナル熟字ノ創
始及書、名、文」という二つの方面から論じ始める。前者は、
關係文獻を徵引しつつ、古代の書體の種類と變遷を一つ一つ
述べるが、中國古來の注疏ならびに日本の朱子學を奉じた新
注學者と訓詁を奉じた古學派の儒者が、文字の發明者につい
て異なる意見をもっていることに對して、次のような持説を
展開している。

案スルニ 支那ノ文字ハ 其初メ一人ノ手ニ成リタルニ
非ズ 一部落ニ於テ之ヲ完成セルニアラズ 各時代ニ於
テ 各部落ニ於テ 各人ノ符號的數字ナリシナリ 故ニ前
ニ掲クル所ハ 以上ニ於ケル十四種ノ文字モ其大數ヲ示
セルノミ 恐クハ各部落 皆其文字即符號ヲ異ニセシナラ
ン 唯當時各部落ニ對シ 最モ勢力アルノ族長ハ 自己ノ
部落ニ行ハルル符號ヲ以テ各部落ニ行ヒシハ 理勢 寔ニ
然ラサルヘカラサルナリ

このように進化論の觀點を取り入れて、文字の制定と革新の

特徴を分析している。

後者は、「文」、「字」の意味と「書」、「名」、「文」がそれぞれ異なる時代に對應していることを分析し、「六書」の説およびその分類意義について重點的に論じている。象形、指事を一符號で一字となるものと見なし、これが許慎のいわゆる「文」であるとし、會意、諧聲を二つ以上の符號で一字となるものと見なし、これが許慎のいわゆる「字」であるとする。そして、假借と轉注は「文」と「字」の使用法とする。これを基礎として、さらに文字の「音、形、義」の關係について補足的に議論している。

今案スルニ 音形義ノ二〔三〕ツ 各其文字ヲ異ニセル
モノニアラス 卽一字ニシテ 音形義ノ之ヲ寓スルナリ
……然ルニ段玉裁ニ至リテハ 其説ノ迂曲 笑フヘキモノ
多シ 段玉裁曰ク 以象形指事會意諧聲假借轉注爲形、以
十七部爲聲、此等ハ凡テノ發音ヲ以テ音韻學者ガ所謂音
ト相混セルノ誤ノ至

段玉裁の、象形、指事、會意、諧聲、假借、轉注を「形」とする説を批判し、十七部を「聲」とする説を「迂曲」にして「笑うべし」とした。

「音韻史總論」では、主に「文字史」と關連する側面から、

文字のまだ成立していない時代の音韻を説明し、あわせて晉代の聲韻説に言及し、「第一聲」、「第二音」、「文節」、「五帝時代ニ於ケル聲音ノ性質及其發達」、「周時代ニ於ケル聲音ノ變遷」、「四聲」、「第三韻」等、七つの方面に分けて説明しつつ、古今の聲・音・韻に對する認識とその變遷を概述する。

五帝ノ時ニハ 聲ト云フモノアリ 音ト云フモノアリテ
其區別 判然タリ 周二至リテハ 聲ト音トヲ互訓セリ
晉ノ代ニ至リ始メテ五帝并ニ周代ノ聲以外ニ聲ナルモノ
ヲ作り 又音以外ニ韻ナル文字ヲ作レリ 然ドモ其意義ニ
至リテハ音韻共ニ毫モ異ナル所ナシ 唯當時ヲシテ韻ナ
ル文字ノ制作ヲ感セシメシモノハ別ニ物アリテ存セリ
……今ノ人單ニ音韻ト云フハ 周代ノ所謂音ト晉以下ノ所
謂韻トヲ合シテ音韻テフ熟字ヲ作りシモノナリ

五帝の時代において、聲と音は判然と區別されていた（「五聲」と「八音」は、人と樂器の違ひである）。周にいたって、聲と音は互訓の關係にあつた（音を聲とし、樂を音とし、聲を樂とした）。晉代にいたって、初めて五帝・周代の聲以外の「聲」を作り、また音以外に「韻」を作つた。今人の「音韻」は、周代のいわゆる「音」と、晉以下のいわゆる「韻」を合わせてつくつた語彙である、と解釋している。このように聲・音・

韻の變遷の梗概を詳しく検討しているが、實際に今日にいわゆる文學と關連する部分は、詩歌、韻文、聲律との關係について論じた次のような各文であらう。

○ 凡ソ詩ト曰フモノハ 志ヲ直言スルモノナリ 然ドモ直言スルノミニテハ 其感動ノ度 甚薄キニヨリテ 之ヲ歌ノ如クニ謠ハサルヘカラス □ (一字分、判讀不可) 之ヲ謠フニハ 語尾ヲ永ク引キ 其抑揚ヲシテ正シク五聲ニ響カシメサルヘカラス 如何トナレバ 五聲ハモト語尾ヲ永ク引カサレバ 人ヲシテ明聽セシメ能ハサレバナリ 而シテ十二律ヲ以テ人聲ト物音トノ合ヲ和シ 詩ヲシテ其妙ヲ盡サシムルト云フニアリ

○ 今ノ學者 有韻ノモノヲ取りテ 皆直ニ之ヲ詩ト云フ 凡ソ韻アルモノハ 皆詩ナリト云フ 提案タリ 支那ノ古文ハ韻アリ 故ニ支那ノ古文ハ皆詩ナリト云フトキハ 我之ニ對シテ一言ノ答ヲモ爲シ能ハサルニ似タレドモ 此輩 本ト支那ニ於ケル詩ノ字ノ定義ヲ知ラズ 但シ散文中ノ一種ヲ支那ニテハ詩ト云フト曰ハバ 是 頗ル妥當ナルヲ覺ユ 今 不成立的文字時代ニ於ケル事實ヲシテ後世ニ傳ヘシメタルモノハ 種類ヲ列擧スレバ 第一 詩、論理ニ合シテ 當時ノ國家ニ利益アルモノ、第二 歌、

齋藤木の「支那文學史」講義錄について (陳)

論理ノ合不合ヲ問ハズ 國家ニ利益アルト否トヲ問ハズ 第三韻、今日ノ文章之押韻シタルモノニ同シ 以上ノ三者 共ニ皆韻文ナリト云フコトヲ得

○ 凡ソ歌フト云フコトハ 暗記ノ法ニ於テ 其最モ宜シキヲ得タルモノナリ 是以 不成立的文字時代ノ比較的ニ長カリシ所以カ 一言以テ定義ヲ與フレバ 聲音ハ不成立的文字時代ノ文字カ 五帝時代ニ於テ 如何ナル程度ニマデ發達セルカヲ見ルニ 其効用 實ニ文字ニ異ナラサリシナリ 或點ニ於テハ 却テ文字ニ勝レルコトアリ シナリ (以上三則、「五帝時代ニ於ケル聲音ノ性質及其發達」) 先人言フ 古詩三千篇アリ孔子之ヲ刪テ三百五篇トナセリト 之 全ク誣言ニアラサルヘキヲ信ズ 前ニ言ヘル如ク 五帝以來 聲音ヲ合スルモノ 皆謠フヘシ 謠フヘキモノハ 詩ト歌ト文トアリ 而シテ此三者 共ニ皆押韻セルモノナルトキハ 孔子ガ古詩三千篇ヲ刪ルト云フモノ 正ニ此三者ヲ統テ之ヲ刪レルモノナリトハ知ラシタリ 故ニ寧ロ古文三千篇ヲ刪リ三百五篇トナシ名ケテ詩ト謂フト云フ方 穩カナリ (一 周時代ニ於ケル聲音ノ變遷)

彼は、『尙書』舜典の文句「詩言志、歌永言、聲依永、律和

「聲」から説き起こし、詩と歌謠または聲音との相互依存する密接な關係を説き、文字がまだ成立していなかった時代、聲音が文字に相當し、その効用は文字と同じか、ある場合にはそれを凌駕した、とする。また、いわゆる「詩」とは、散文の一種に過ぎず、これと「歌」との區別は、論理と合うか否か、國の利益に關わるものか否かの相違である、ともいう。そして、孔子が三千篇を三百五篇に刪つた、というのは、狹義の詩のみを對象とした選別ではなく、實は詩と歌と韻を踏んだ文の三者、すなわち古文三千篇を對象としたものではなかつたか、と推論する。

「四聲」と「第三韻」では、五帝時代から唐までを視野に納めて、中國人が聲と韻の認識をどのように明確にしてゆき、かつまた五帝時代への復古を如何にして實現したかを概説する。魏の李登が『聲類』の書を記したのは、インドの悉曇、毗伽囉の反切法が中國にもたらされたことにより、四聲を容易に配當できるようになつたからで、これにより四聲が明らかにされた、と説く。晉・呂靜は『韻集』を著し、齊・周顒は『四聲切韻』を著したものの、いずれも五聲に分けなかつたが、梁・沈約は音樂に長じ詩名をほしのままにした持ち前の才能に基づき、平聲を二つに分けた。かくて、五帝の舊に

復することができるようになつた。その後、隋の秦王俊は『韻纂』を著し、陸法言は『切韻』を著し、唐・孫愐の『唐韻』が出るに至つて、諸書はみな廢れ、五律がすでに舊に復したうえに、律呂もまた明らかになつた、という。——以上が、「四聲」と「第三韻」の概容である。

「文學史本論」は、「支那文學史ノ時代及概綱」、「周代ノ文學」、「周初ノ文學」の三つと管仲、墨子、『晏子春秋』（存目）、孔子、『書經』、『詩』の六義と『詩序』等についての論述とによつて構成されている。

「概綱」では、冒頭の「文學史總論」において概括した四つの時期を、改めて二大時期に總括し直して提示する。すなわち、第一期は「創意の文學」で周時代、第二期は「模造の文學」で、漢より宋、清の時代までである。第一期は、實際には中國文學の發生、成育時代であるから、文學史において最も重きを置くべきであることを強調する。第二期の主な時代として、漢、宋、清が挙げられるが、漢は字書の時代、宋は心解の時代、清は直解の時代であり、總じて第一期の文學に對して解釋を加えるものなので、齋藤はこれらを解釋の時代と總括する。漢はまず第一期の文學に基づいて訓詁を施した。宋になると、學者の見識が一般に一段高くなり、字書に依る

のを潔しとせず、直接第一期の著述に遡り、自己の心に基づき解釋を進めた。その思想は、體が氣であり、理が心であり、天下の理は己の心にあるから、自己の心を標準として解すべきだ、とするものである。清代になると、學者はさらに一歩進め、漢・宋のいずれも取らず、第一期の書は第一期の書に依據して解釋すべしとし、本文を様々に考證し、「直解」した、という。また、字書の時代から心性の時代への變化を促したものは、達磨が梁武帝の大通元年に來華したのを發端として、これ以降、儒と佛に密切な關係が生まれことに起因すると説く。

「周代文學」では、第一期を概論することに重點を置く。そして、第一期を細分し、以下のように二項對立的に概括する。

・五帝三皇——口碑時代——潜伏——供給——聲音——
韻文——感情
・周——筆冊時代——發顯——需要——文章——
散文——智力

この表から、彼の考察の視點、ならびに描こうとした發展の軌跡を窺い知ることができるといふ。以下は、仁、義、禮、知、信の字義を分析し、さらに關連する道德と五常の別へと一歩

齊藤木の「支那文學史」講義録について（陳）

論を展開し、これらがすべて社會、すなわち時代に即して名づけられたものである、とする。「仁」は、五帝時代には、「任」「壬」と書き、價值は低かったが、周になると、もっぱら「仁」の字を用いて大いに尊び始める。それは、五帝時代がいわゆる「道德」の時代であったからで、すべては自由な意志によつて氣ままに決められていた。一方、「仁」の時代には、自らの行爲に自らが責任を負うという考えが生まれ（「仁」は、二人の意で、人が他者と對になつて動作することを意味する）、夏の禹帝、殷の湯王はみな「仁」によつて諸侯を籠絡し、天位はずつと子孫によつて世襲させ、周の文王になつてもこれを旗印にした。孔子は文王を周室存續のための目標としたから、盛んに「仁」を説いたのだ、という。周の武王の時代になつて「義」を取り入れたが、「義」は臨機應變の意をもち、それゆえ「仁義」を上手に用いることが王道となり、さもないければ霸道とされた。また、周初は「禮」の時代で、周末は「知」の時代とする。「禮」とは、神に供物を捧げ、神の下した命令を履行することを意味する。そのため、古人は「履」を「禮」と訓じている。つまり、「禮」は、異なる血族を糾合して生まれた國家の最初の政略である、とする。周初は幾つかの血族からなつていたが、禮を用いて人爲的に一つの血族

を作る政略をとった。だが、結果として無数の血族となつてしまつた。それが、周末の状況であり、それゆえ數多くの學者が生まれ、どのような政略によつて統制すべきかの論を立て（「知」とは、一言でもつて矢のごとく人の肺腑を刺すことができ、の意である）、「信」は漢代に行われたもの、とする。齋藤は、本來は「道德」が人と神との關係を作り、「仁義」が人と人との關係を作るが、今日では人と神との關係を宗教として、人と人との關係を道德とすると誤解していることを強調する。このような分析を展開した理由は、以下のことを示さんがためである。すなわち、國體、政體、教體がそれに相應しい學說を必要とするならば、周末の學者は往々にして國體がすでに代々變化していることを理解せず、過去の國體に適應した政體・教體を、彼らの時代において實施しようとした、というものである。齋藤は、國體、政體、教體三者の異同を、以下のようにならして對比し、

・國體——國家ノ自吾——組織——筋骨
 ・政體——國家ノ意志——精神——氣血
 ・教體——國家ノ働作——作用——皮肉

然る後、歴史における實際の關係を次のように圖示している。

國體 政體 教體
 ・五帝時代……………貴族共和……………道德
 ・周初……………王政……………仁義禮
 ・周末……………霸政……………知

「周初ノ文學」では、主に『周易』について論じ、始め文字を卦としたことを、文學史の始まりと見なしている。以下、管仲を論じ、『管子』は管仲が記したものではなく、大抵は葉適の説に従つており、「經言」および内・外篇はその意を汲むものとし、それ以下の編は句を拾い集めたものと弁ずる。次いで墨子を論じ、「經上」「經下」の二篇が、『墨子』本來の書であり、「經說」篇は後人や門弟たちが加えた説明であると、「兼愛」、「尊天明鬼」の説の一部を引いて解説する。次いで孔子を論じ、彼の學問の性質は、孟子がいわゆる集大成者であると簡潔に説き、その教育法を略述している。孔子の哲學については、以下のような簡表によつて比較している。

・大學 心 意 知
 ・中庸 仁 勇 知
 ・西洋 情 意 知
 ・佛教 猿 馬 獅

次いで『書經』を論じ、古文、今文の沿革を略述する。次

いで『詩』の六義を論じ、その實體は三體三用であるとし、すなわち、比、賦、興は『詩』の體、風、雅、頌は『詩』の用であるとする。その上で、『詩經』を傳えた系譜を略述する。次いで「詩序」を論じ、大小の序を子夏、毛萇、衛敬仲の合作とする。以下、さらに『詩』のなかで周家の政略を最もよく示す部分が、「二南」の詩である、とした。また「關雎」の詩を韻譜に合わせて圖示し、三百篇中の最も高い音は羽音で、そこに一篇の主意を歸宿せしめ、また稀に最も弱い音に託する例外が時々現れる、とする。

四、齋藤「文學史講義」の特徴とその位置

中國文學史の發端といえ、おのずと明治十五年（一八八二）、末松謙澄（一八五五—一九二〇）が英國留學中に發表した『支那古文學略史』にまで遡る。たしかに、彼の「文學」概念は、後の人々が抱く、ヨーロッパ浪漫主義以來の觀念とは異なるため、一般には嚴密な意味での最も早い文學史と認めることはできない⁽¹⁹⁾にしても、その著述動機に反映された當時の學界や日本の社會が直面した諸問題、ひいては通史形式の運用を試みたことそれ自體によつて、確實に文學史創始のある種の標識と見なすことはできる。この書は、福澤諭吉が『學

問のすゝめ』、『文明論之概略』等の著作で展開した儒教批判の土壤の上に形成された⁽²⁰⁾と考えられ、目を見開いて世界を見た新世代の知識人（いわゆる「東眼西視の人」）が、明治初期の歐化政策のもと、漢學の意義と役割を改めて一から詳らかに検討するという革新精神を體現している⁽²¹⁾。彼は、新たな視野のもと、中國上古文化の成果が東洋文明に對して重要な價值を持つていることを強調し、『支那古文學略史』上卷の卷首において、文化の起源から詳しく論じて、「支那古文學ノ東洋文學ニ必要ナルハ猶希臘羅馬學ノ西洋文學ニ於ケルカ如シ」と記している。その一方で、新たな立場から、朱子學を中心に孔子を解釋する傳統的漢學の學問方法に反發し、文獻によつて先秦の政治社會制度や人文思想を考察すべきだ、と主張した。その目的は、「而能爲實用利國、啓導世運之學」（現實社會に役に立ち國に利益を與え、世の盛運を開き導く學問に變える⁽²²⁾）ことにあつた。これは、單に漢學復興の機運を高める思想的基盤となつただけでなく、やや後の學者たちが漢と和の古典を改めて検討し直す道を直接開いた、といつてもよい。

國粹主義的な政治勢力が勃興してくるにつれ、ひたすら西洋の技術ばかりを目的とする當時の空氣に對する反發が起り、近代教育體制のなかにも、東京大學が明治十六年（一八

八三)に古典講習科乙部を設置したり、同十九年(一八八六)に漢文學科を獨立させたり、といった一連の動きが生まれた。この點が、明治二十年代の後期から三十年にかけて、中國文學史の著作が大量に出現した基盤、もしくは背景になった、と見なされている。⁽²³⁾當時の中國文學史關連の著者のうち、兒島獻吉郎(一八六六—一九三一)から藤田豊八、笹川種郎(臨風、一八七〇—一九四九)、高瀬武次郎(一八六九—一九五〇)、久保得二(天隨、一八七五—一九三四)に至るまで、すべてがこの古典講習科もしくは漢學科を相前後して卒業した者たちであった。彼らが受けたのは新制の官學教育であったが、とりわけ藤田豊八等の新漢學派は、自覺的に西洋文學の研究方法を手本にしており、卒業後、すぐさま陸續と中國文學史を執筆することによって、古典の傳承と批判を展開し、國民教育を普及させるという理想を掲げた。

これと時を同じくして、私學たる東京專門學校が文學科を創設したのも、日本が東西文明の結節點に立つとの立場に基づき、和・漢・洋の三文學の長所を選び取り、それを統一調和して明治文學を作り上げようとするものであった。それゆえ、文學教育を振興し、國民の素養を高めることを、もつとも重視した。かくて、より廣汎な學外生に向け發行された文

學科講義録も、中國文學史關連の著述の誕生を促し、それを公表する重要な據點の一つとなったのである。前述の兒島、藤田、久保の各氏も、みな早稻田大學、もしくはその前身である文學科の講義録として、それぞれが講義した中國文學史を公刊した。その後、さらに、松平康國の『支那文學史談』、宮崎繁吉の『支那近世文學史』等も出版された。齋藤木も、在校生のため漢文學と史學の講義を擔當すると同時に、校外「邦語文學講義」の講師陣に加わっている。⁽²⁴⁾

したがって、齋藤の文學史講義は、末松謙澄等「東眼西視の人」が提示した漢學革新から、藤田・笹川・久保等に代表される「赤門文士」の新漢學派へと移行してゆく、その座標の中間に位置づけられる。彼以前に發表された中國文學史の著述は、末松のそれを除くと、わずかに兒島が明治二十四年(一八九一)八月から二十五年二月に同文社の『支那文學』第一一十一號(第十號を除く)に發表した『支那文學史』、および明治二十七年(一八九四)五月から十月(?)に漢文書院の『支那學』第一、二、六號に發表した『文學小史』があるばかりである。兒島と同科同年の卒業である黒木安雄(欽堂、一八六六—一九二三)も、かつて『支那大文學史』を著し、かなり早期の著述といつてよいが、惜しむらくは未完成に終わった。⁽²⁵⁾

古城貞吉の『支那文學史』は確かに明治二十四年に書き始められているが、明治三十年（一八九七）五月に至つてようやく經濟雜誌社から出版されている。このほかに、九州大學の竹村則行教授が、かつて東京神保町で購入した狩野良智『支那文學史談』、和装一冊を筆者に示され、その卷末には明治二十三年の跋が附されていたと記憶しているので、⁽²⁶⁾これも齋藤の講義よりさらに早い（ただし、内容は、子細に検討する暇がなかった）。

兒島獻吉郎が、講義録形式の『支那文學』に連載した『支那文學史』は、中國文學史の「濫觴」と見なされるが、⁽²⁷⁾ここで述べられたのは、わずかに第一編の「上古史」だけで、「夏商ノ文學」から「周末第三期ノ文學ハ流派分裂ノ中ニアリ」までである。やや後に發表された『文學小史』においても同様で、「虞夏の時代」から「春秋戰國の時代」までである。これは、末松の『支那古文學略史』が關心を寄せた範圍とおおむね近似する。むろんこの現象を、必ず起源から語り起こさなければならぬ文學史の必然と解釋することもできるし、あるいはまた、當時その後の時代の考察を完成させる暇がなかったと解することもできる。しかし、前述の末松が論じた執筆の意圖から知られるのは、むしろこのような傾向こそ當

齋藤木の「支那文學史」講義録について（陳）

時の學者が東西文明の衝突という新たな視野の下に置かれていたことを反映したものであり、中國上古文化に對する高い價值認識は、彼らの歴史觀を反映したものにほかならないという點である（この點はまた當時の中國に對する彼らの見方や態度とも密接に關係する⁽²⁸⁾）。たとえば、末松が「蓋シ支那人氣ノ最モ發達シ學術文章技藝ノ最モ進歩セシハ戰國ノ世ニ若クハ無シ」といつたように、春秋戰國の世はその魁をなした時代なのであった。

また、兒島が明治四十二年（一九〇九）に富山房より刊行した『支那大文學史古代篇』の全體的時代區分からは、もつとはつきりそれを見て取ることができるかもしれない。すなわち彼は、庖犧氏以後帝堯に至るまでを「胚胎時代」とし、唐虞以後周の平王の東遷までを「發達時代」、春秋戰國を「全盛時代」、秦の始皇の統一から子嬰の滅亡に至るまでを「破壞時代」、兩漢の世を「彌縫時代」、魏晉から隋滅亡までを「浮華時代」、唐宋の世を「中興時代」、元明の世を「模倣時代」、清の康熙から今に至るまでを「集成時代」としており、彼の評價が最も高いのは明らかに春秋戰國の世であつた。一部の研究者はすでに注意しているが、このような「復古」史觀は、明治四十五年（一九一二）、富山房より刊行された『支那文學

史綱』のなかで、ようやく進化論の立場による歴史叙述に取って代わられる。⁽²⁹⁾

それと同様に、前述の『支那文學史』（一八九一—一八九二）、『文學小史』（一八九四）における兒島の「文學」觀念も、いまだ傳統的な「文章、學問」という認識の中から完全には脱皮してはいなかった。⁽³⁰⁾ たしかに、彼はすでに『文學小史』において、「文學」及び「文學史」の職能について定義化を試み、「文學トハ文字ニ由リテ人ノ思想情感ヲ發揮スルモノナリ」、「文學史ノ要ハ普ニ普通ノ歴史ノ如ク人ヲシテ客觀的一個ノ事跡ヲ知ラシムルノミナラズ、主觀的人心ノ活動ヲ摘出スルニ在リ」と述べてはいる。しかし、彼が文字による創作を文明の標識と強調し、それを指標として文學の起源を探し求め、それによつて文字を言語と對置させて、文章の進歩と詩歌の發達を早晚優劣の別でもつて論じた際、文字の記録と定義される文章に偏重したのは、実際にはなお思想・學術と頗る關わつていた（『支那文學史』が、もともと「第四章ニ文字ノ沿革ヲ敘へ、第五章ニ典籍ノ眞偽ヲ敘へ」る計畫であつたことを含む）のであり、いわゆる「主觀的人心ノ活動」も、當然ながら今日の「文學」よりずっと廣汎な概念であつた。この種の文學觀念は、彼の『支那大文學史古代篇』（一九〇九）においてもな

お生き續け、明治四十五年（一九一二）の『支那文學史綱』に至つて、はじめて「凡例」のなかで反省して「余は曩者支那大文學史を著はすに、泛濫停蓄、多きを貪り得るを務むる」と彼は述べたのである。——この點も關連の研究がすでに注目する事實となつてゐる。⁽³¹⁾

兒島の『支那文學史』、『文學小史』だけを取つたならば、明らかに、齋藤の講義と同様、ある種の過渡期的な特徴を帯びてゐる。そして、このような特徴は、作者自身の經歷と不可分の關わりがある。兒島は備前の代々儒者を務めた家の出であり、東大の古典講習科漢學課に入學する以前、家學の薰陶を受けていた。そればかりでなく、十八歳で上京した後も、二松學舎に入り、三島中洲の門下生となり、そこで傳統的漢學の教育を受けてゐる。そのため、彼のなかの傳統的漢學の基礎は相當深くしつかりとしていた、と見積もられる。さらには、成立して間もない東大古典講習科漢書課も、同様に傳統的な漢學的訓練の延長線上にあつたことを、あわせて理解すべきであらう。ゆえに、兒島、黒木であれ、齋藤であれ、さらには狩野良智であれ、實のところ程度の差はあれ、みな傳統漢學から新漢學への變革の最中に我が身を置いていたのである。兒島が後に成果を見た理由は、彼が中國文學史の領

域にこだわって長年努力した上に、時代の變化に應じて己の研究方法や視角を調整することができた點にある。

齋藤木の文學史講義の基本的な構造や内容から知られるのは、彼の關心の重點が、末松や初期の兒島と同様に上古の周代文學にある、ということである。彼はそれを「發明の時代」、「創意の文學」と見なし、その後長く續く「解釋の時代」と截然と區分している。かつまた、このような時代區分が依據したのは、むろん、思想・學術を中心とする、廣義の「文學」觀念である。もし、その特徴を説明しようとするならば、少なくとも以下の二つの點を挙げられると思う。

まず、末松以來の方法と路線を襲い、考察の視點を先秦の社會政治制度ならびにその根底にある人文思想に集中した點である。具體的にいえば、いわゆる周家の政略に對する彼の特別な關心がそれである。彼は、文字・文獻の考察から取りかかり、道德・五常の別が、すべて社會、つまり時代に即して名づけられたものであることを辨じ、さらにそれを國體、政體、教體の學說の中にまで貫徹させて、實に中國上古の思想・學術・制度を系統的に組み立てるための中核的内容としている。この點は、兒島の關心となお異なる部分をもつ。彼のこのような考察には強烈な現實政治に對する目的が内包さ

れていた。それは、日本の君主政治のために立論の根據を探るといふもので、後の『日本倫理原論』がこれを敷衍して一書をなしている。

すでに述べたように、立國三體の學說に照らして、彼は五帝時代の政體を「貴族共和」、教體を「道德」、周初の政體を「王政」、教體を「仁義禮」、周末の政體を「霸政」、教體を「知」とした。かつまた、齋藤が『日本倫理原論』のなかですでに指摘するように、幾つかの血族から構成された周初の社會は、一つの血族となることを第一の政略とし、そこには人為的な性格を含んでいるので、孔子は仁については、主に文王の「仁」を本體として解説した、とする。こうした分析は、すでにある基本的な傾向をそなえている。『日本倫理原論』のなかで、彼はこの三體の學說を全世界に擴大しようとしたとき、その理想のモデルは次の通りでなければならぬ、としている。

國體	政體	教體
雜居——民政共和——信		
雜族——貴族共和——德		
一族——君主政治——道		

(八頁)

ここで、中國上古の五帝時代は、雜族國體下にある貴族共和

政體の見本のひとつと見なされ、徳がそれに相應する教體であり、それは東西一致する、としている⁽³²⁾（三八頁）（齋藤の文學史講義の「音韻史總論」、五帝時代ニ於ケル聲音ノ性質及其發達」の項においても、五帝の時代に關連して、凡そ一血族の長は、元后の天下、衆くの族長の長たる權利をもち、ただ徳によるのみであった、と論じている）。いわゆる「徳」とは、彼の考えでは、「道」とも區別され⁽³³⁾（四〇〜四七頁參照）、「仁」とは最も異なり、至誠に近づこうとするもの、ととらえられていた。一方で、「仁義」を偽善とし、三代を偽善の世としている（四七〜五〇頁參照）。このように解釋する意圖は、儒教を日本の教體にすることに反對し、日本をすべてが遠く皇室へと連なる末裔からなる一血族と見なして、無意識なる「道」を教體にすべし（五六〜七八頁參照）と主張とすることにある。ゆえに、有賀長雄は卷末の總評のなかで、「一篇の要旨は、泰西及漢土は雜居即ち複姓の國なり 故に其教體は人爲を以て工夫したるものなり 之に反し日本は一族即ち單姓の國なり 故に道義の本體は何人の之を作工するなく自然に備はる」と總括しているが、その一方で「唯著者が身を漢學より起して而して漢土聖人の道教を排斥するは余の取る能はざる所とす」とも見なしている。だが、實際には、——本書の第三章第四節において明治初期以來の

思潮の變遷を簡潔に整理した時——すでに齋藤自らも言及しているように、これは紛れもなく、明治二十一、三年以來、日本主義的議論が極めて勢力を得たことを背景とする、時代の産物であつた、といつてよい。

第二の特徴は、前述の觀點とも關連するが、五帝時代の聲音の教えを彼が大いに尊重している點である。彼は五帝時代の社會政治制度にかなりの程度感情移入していたので、その教體（「徳」）を載せる「文學」（傳統的意味における文學）形式であり、確かな効能をもつ「不成立の文字ノ時代ノ文字」（「聲音」）が發達し、人々の情感を感化せしめた、その自然な發展形態に對しても、きわめて高い評價を下している。そして、『尙書』の「鳳皇來儀」、「神人以和」、「虞賓在位、群后徳讓」等の文句は、聲音の効用がもつとも高尚なる程度にまで到達していたことを十分證明していると見なし、聲音に文字と同等か、もしくはそれ以上の効用があつた、と説いている。この點に鑑みて、彼は音韻學にも特別な注意を拂う。たしかに、それはなおも清代考據學の學問的枠組みにおける技術レベルの検討に終始してはいるが、彼の獨特な價值意識によつて、そこに「文學」的文化とでも稱すべきある種の意義が植えつけられ、音韻史の展開が五帝の舊制を踏襲しそれを恢復

する過程として描寫されている。かつまた、前述の通り、彼は「發明時代」の第一期を以下のように細分した。

・五帝三皇……口碑時代——潜伏——供給——聲音——

韻文——感情

・周……筆冊時代——發顯——需要——文章——

散文——智力

齋藤の考えによれば、五帝時代の口頭語による「文學」は「潜伏」の状態にあると見なされ、周代の文字によつて記載されるそれは「發顯」された状態と見なされる。ここから推測されるのは、「文學」の發生と變化は、口頭傳承と文字記録の間で、内在的に相互關連しつつ變化もしくは發展した、と齋藤がとらえていることである。この點は、兒島の考え方も異なっている。兒島が「文學」を文字による創作と定義しそれを強調した理由は、當時の論者の多くが唱えた説——詩歌が隆盛した後文章が興隆したとする説——に反對し、倉頡が文字を創造してから、虞夏の時代に下るまでの間、文章の進歩はまことに驚くべきものであり、詩歌の發達はそれと比べて見劣りする、と考へていたからである。⁽³⁴⁾あるいはこうした考へ方に制約されたためであろうか、彼の初期の文學史『支那文學史』と『文學小史』には、ともに音韻學について専門

齋藤木の「支那文學史」講義録について（陳）

的に論ずる章節は設けられておらず、かつまたそういう計畫も存在しなかつた。『支那大文學史古代篇』に至つて初めて關連の論述が用意されたのである（その後、『支那文學考韻文篇』のような重要な成果も生まれた）。このように、齋藤の文學史講義は、依然として傳統的體制の内側に位置するとはいへ、いわゆる文學史の叙述のなかに、音韻史をかなり有機的に組み入れた、最早期の文學史となつたのである。

時代の思潮が急激に移り變つたことによつて、齋藤が用いたような文學史の叙述モデルと文學史觀は、あつという間に乗り越えられていった。明治二十八年（一八九五）、東大漢學科を卒業した藤田豊八は、同年九月から明治三十年に中國に渡るまでの間、東京専門學校の文學科で「支那文學史」を講義したが、この講義は彼ら新漢學派が在學中に追求した「科學的研究の方法」の實踐であり、手本であつた。⁽³⁵⁾彼は、哲學等の領域と文學の間に、明確に一線を畫すことを標榜した。たとえば、『支那文學史稿 先秦文學』（一八九七）の「凡例」第四條において、「評論多く其學說に及ぼさず、たゞその思想の傾向を示すに過ぎず。他日幸に哲學史を草するの期を得んを庶幾す」と説明している。ただ單に文學觀念の面ばかりではなく、さらに「漢學に新考證を施さん」（同上第六條）とも

強調している。彼のいう「新考證」の方法とは、基本的にテーヌ (Hippolyte Adolphe Taine) が『英國文學史』の「導言」のなかで述べた、文學の創作とその發展は三つの力——種族、環境、時代——によって決定される、という理論を運用したものであった。⁽³⁶⁾これは、三上參次、高津鏞三郎著の『日本文學史』を通じてこの方法を受容した、古城貞吉の『支那文學史』(二八九七)と、同趣と見なすことができるが、藤田はおそらく古城よりずっと自覺的であつたであらう。

また、注目に値する以下のような事實もある。すなわち、三上は明治二十五年七月〜同三十二年一月、高津は明治二十六年九月〜三十一年八月、ともに東大文學部で教鞭を執つてゐる。⁽³⁷⁾一方、藤田等による『支那文學大綱』編集刊行の計畫は、むしろ國文科同人による『國文學大綱』に刺激され、それに連鎖した行動であつた、といつた方がよい。その『國文學大綱』の卷頭語には、西洋の文學批評の手法を借りた、とはつきり述べてゐる。⁽³⁸⁾この當時、藤田が國文科の師弟たちと認識を共有していたことは、ほぼ疑問の餘地がなく、したがつて右の事實はただちに彼の當時の學問的環境と背景が如何なるものであつたかを端的に物語つてゐる。

島村抱月は、明治三十四年(一九〇二)頃、早稻田中學の教

師に着任し、それと同時に母校に戻つて中國文學史と美學を講義した。⁽³⁹⁾彼は自分の「支那文學史講義」のメモを、大小異なる三冊のノートに分けて記録している。そこに反映されているのは、前後三回、彼が絶えず調整を加えた講義の全記録である。⁽⁴⁰⁾(現在、早稻田大學圖書館貴重書庫に所藏されている。なお、この講義録は八卷本『抱月全集』には未收)。大西祝の學風に深く影響を受けた優秀な學生として、⁽⁴¹⁾抱月は在學中すでにボザンゲの『美學史』を熟讀していたのみならず、その後さらに長期にわたつて西洋美學、修辭學、ならびに歐州文藝史の研究と教學とに力を注いだ。それゆえ、彼の知識構造と視野の廣さは指して知るべしである。かくて、彼の中國文學史講義は、劈頭、文學史の定義と範圍、中國文學の特色と大勢を論ずる時にせよ、中間で周代文學を論じ、『詩經』をより突出した地位に置き、重點的に詩形と詩想との両面から解析する時にせよ、大なり小なりみな藤田の文學史から直接刺激を受けた箇所や、彼に對して挑戦した部分を、はつきり見て取ることができる。⁽⁴²⁾それに比べ、若い頃、聽講した齋藤の文學史講義は、おそらく第三回講義ノートの「緒論」のなかで説かれる「從來の支那(文)學研究の極めて雜駁無秩序」なるものの部類に入れられたに違いない。そして、ついには人々の視界から

フェードアウトしていったのであろう。

注

この翻譯では、讀者の便を考慮し、原文にはない生卒年や西曆等の表示を附加した場合がある。また、() 内の内容は、原則として、著者による補足であり、「」内は譯者によるものである。(譯者)

本論文は、筆者の擔當する復旦大學文史研究院第二回項目『文學史敘述的現代轉型：西學知識、日本經驗與本土化進程』に屬する研究課題である。

- (1) 文學科創立の翌年(明治二十四年(一八九二)九月)、文學部に改稱される。『早稻田大學文學部百年史』第一章「文學部略史」、1992年版、12頁を参照。
- (2) その一つが寫眞番號 B3307 のエル・ビー・チャモレー、市島謙吉、増田藤之助、大隈英麿、坪内雄藏、天野爲之、鳩山和夫などと座して寫つていて、明治四十一年(一九〇八)年三月四日市島謙吉寄贈。もう一つは寫眞番號 B5701、チャモレー、市島謙吉、増田藤之助、大隈英麿、坪内雄藏、天野爲之、鳩山和夫などと座して寫つている。
- (3) 東京大學の大木康教授に閱覽、複製をお願いし、更に明治漢學に關する辭書及び二松學舎大學のデジタルデータベースを調

齋藤木の「支那文學史」講義録について(陳)

査していただいた。特にここに謝意を表する。

- (4) 『陸軍中央幼年學校一覽』「第一、沿革略」により、谷田文衛は明治二十九年九月から三十一年(一八九八)十月まで在任(明治三十九年版、6―8頁)していたことが分かる。また同書「附表第二、陸軍中央幼年學校本科教授部門課程細目表」には、第二學年前期に「倫理學要旨」課程がある。
- (5) 『新潟新聞』明治十五(一八八二)年八月八日「青槐學舎建築廣告」には塾號は清國の欽差大臣何如璋が贈ったとある。
- (6) 『新潟新聞』明治十六年三月二十四日「青槐書院の齋藤文哉の名聲」参照。
- (7) 『東京大學百年史』「資料三」中の「主要人事一覽」を調査したところ、文學部の正式な教員名簿に齋藤木の名前は見えなかった(133―142頁)。また、陸軍大學は陸軍中央幼年學校とするのが適當である。
- (8) 國會圖書館所藏『寺内正毅關係文書目錄』に「齋藤木書翰」一通が記録されている。
- (9) 布施知足はかつて一九三〇年代に實藤惠秀、増田涉等と魏源『海國圖志』を日本に輸入し、また『王紫詮の扶桑遊記』(『東亞研究講座』八十四號、一九三八年十二月)等の著作がある。伊藤重治郎は若いころ東京英語學校、慶應義塾に學び、後に早稲田大學教授となり、『交通論』、『海運論』等の著作がある。八田亨は待考。
- (10) 吳汝綸『東游叢錄・摘抄日記』を参照。三省堂書店一九〇二年版、32頁。

- (11) 『桐城吳先生全書・尺牘』卷四「復齋藤木」、「答齋藤木」(光緒甲辰吳氏家刊本)を参照。また中華民國の時代に出た『古人論文大義』(出版年月、編纂者未詳)、石印線装一冊は、韓愈以下晚清に至るまでの古文家の論文、文章を収録しているが、吳汝綸の數篇を収める中に、この二通がある。
- (12) 文學科一年次の九月開講科目の廣告(『郵便報知新聞』十月五日號)によると、高田早苗「國家論」、畠山健「徒然草」、響庭篁村「課外講義」、森槐南「杜詩偶評講義」、下山寛一郎「萬國史」、落合直文『今古集』、文學作歌、三島中洲『論語』講義、森田思軒『詩經』講義、三宅雄二郎「論理學」、坪内雄藏「英文學史」、信夫恕軒『史記』講義、關根正直「和文學史、和文文法」等(『早稻田大學學術研究史』(文藝・人文科學部門)、二〇〇四年版、95頁)がある。
- (13) 明治三十六年、早稻田大學は高等師範部國語漢文科を開設し、松平氏、牧野謙次郎、菊池三九郎や桂五十郎等が「早稻田漢學」の陣容を形成した時には、齋藤氏は既に早大を離れた後だった。
- (14) 山内晴子『朝河貫一論：その學問形成と實踐』55頁に引く。早稻田大學博士學位論文、二〇〇七年九月、指導教授：山岡道男。
- (15) 網島榮一郎が明治二十六年五月九日に記した日記に當時の第三期學生混沌社茶話會に第二學年の課程の内容を變更するよう要求したとある。それを参照。山内晴子『朝河貫一論：その學問形成と實踐』56頁より轉載。
- (16) 『早稻田大學百年史』第一卷、660頁を参照。
- (17) 『早稻田大學文學部百年史』、11頁を参照。
- (18) 『早稻田大學百年史』第一卷第二十二表『講師就退任及擔當科目』(1039頁)を参照。
- (19) 吉川幸次郎が既に「この書はその標題から見れば實に世界最初の中國文學史であるが、内容は先に述べた如く主として經書および諸子につき、その文體よりも思想の方に重點を置いて論じたもの」と指摘している(『中國文學研究史』、『吉川幸次郎全集』十七、筑摩書房一九六九年版、389—390頁)。
- (20) 川合康三編『中國の文學史觀』「資料篇」の松本肇による本書解説、創文社二〇〇二年版、18頁。
- (21) 『支那古文學略史』に附録される明治十五年三月八日の土田政次郎の書および末松謙澄の志、『支那文學』第一號『百家言』所載スコットランド、エジンバラ府に於ける東眼西視人(井上陳政)の『漢學革新論』等を参照。
- (22) 前注に引く東眼西視人『漢學革新論』に見える。
- (23) 和田英信「明治期刊行の中國文學史——その背景を中心に」(川合康三編『中國の文學史觀』157—166頁)に、竹村則行『支那文學大綱』と田岡嶺雲(同上182—183頁)など關連する例證と論述とを詳しく引用している。
- (24) 『早稻田大學百年史』第一卷、852頁を参照。
- (25) 松平康國『支那文學史談』「緒言」、早稻田大學出版部、出版年月未詳、2頁参照。
- (26) 狩野良知(一八二九—一九〇六)、秋田藩士、『先憂文編』の

著作がある。その他那珂通世『増補支那通史』十卷（清光緒三十年刊）は彼が校訂した。

- (27) 三浦叶『明治の漢學』第二部第七章「明治年間に於ける中國文學史の研究」、汲古書院一九九八年版、292頁。
- (28) 竹村則行「日中「中國文學史」初期著作中の「西學東漸」の總括部分に、明治期の文人の中國觀が實證的に提示されてい、参照するべきものである。（『中國近現代における「中國文學史」纂述に關する基礎的研究」、平成十七—十九年度科學研究費補助金 基盤研究C研究成果報告書、52頁）。
- (29) 杜軼文「兒島獻吉郎の支那文學史研究について」の『支那大文學史古代篇』と『支那文學史綱』の時代區分の視點の比較に關する部分を参照。二松學舍大學人文學會『人文論叢』七十一（二〇〇三年十月）、191—192頁。
- (30) 川合康三編『中國の文學史觀念』「資料篇」の幸福香織による解説（29頁）を参照。
- (31) 同前注。
- (32) このため、松崎藏之助は特に「五帝時代を稱して貴族共和政」と云ふ卓見卓見古人未だ道破せざる所」と評する。
- (33) 故に松崎氏はまた「道と徳との弁分折し得て痛快又簡明」と評する。
- (34) 以上は三浦叶『明治の漢學』第二部第七章「明治年間に於ける中國文學史の研究」中の兒島獻吉郎『文學小史』に關する論述（293頁）を参照。
- (35) 『帝國文學』一卷八號（明治二十八年八月）「雜報 東亞學院

齋藤木の「支那文學史」講義録について（陳）

講義録發行緣起」を参照。

- (36) この問題についての具體的な分析として、拙論「泰納的文學史觀與早期中國文學史叙述模式的構建」、韓國ソウル大學『中國文學』第四〇輯（二〇〇三年、十一月）を参照。
- (37) 『東京大學百年史』（資料三）「主要人事一覽」（141頁）を参照。
- (38) 竹村則行『支那文學大綱』と田岡嶺雲、川合康三編『中國の文學史觀』（186頁）に詳しい。
- (39) 三浦叶『明治の漢學』第二部第七章「明治年間に於ける中國文學史の研究」の例證、308頁を参照。
- (40) 本間久雄が『抱月全集』第三卷卷首『美學及歐州文藝史』の編纂に就て」で説く「先生の遺された數種の稿本を調べたが、説明の仕方や、立論の様式やが決して同じではない。いづれも多少づゝ違つている」とする特徴と同様である。
- (41) 島村抱月の卒業論文『覺の性質を概論して美學の要狀に及ぶ』、大西祝の指導により、文學科開設以來の最優秀の畢業論文とされている。
- (42) 第一回講義の筆記「總論」は、中國文學の特色の原因形成を論じる時、藤田の説に對し、「凡テ理外緣ヨリ來る性質とせり學過狹ニ失す」とみなしていたが、第三回講義筆記的「緒論」部分で、あつざりと中國文學の特色の内容を取り消している。竹村則行教授所藏の藤田氏『支那文學史』（東京專門學校文學科講義録）によると、「序論」の前に島村氏の「支那文學史總論」がある。（川合康三編『中國の文學史觀』「資料篇」に錢鷗

中國文學研究 第三十六期

のこの著作についての解説がある、38頁を参照)、残念ながら早稻田大學圖書館所蔵本にはこの内容の記述が無い。

(伴 俊典譯)

附記：本稿の執筆と翻譯にあたっては、畏友内山精也教授と院生の伴俊典君に多大の協力と助言をいただいた。ここに深く感謝の意を表します。